ミーティングリポート

6月に開催しましたスポーツネットミーティングでは、試合前や大会に向けての選手の対応についてディスカッションをしました。実際に現場で起こった選手の実例から様々な意見を話し合いました。

＜試合期における怪我をした選手の対応＞

高校スポーツでは、各種目によるインターハイ予選が始まり、高校野球では甲子園への出場権をかけた県予選が近づいてきています。皆様の現場で選手の怪我について困っていることはありませんでしょうか？今回は、試合期に向けて怪我をした選手に対してどのような対応ができるか、またどのような対応をすることがベストなのかを参加者の皆さまと話しをしました。

〇怪我が起こった時に、誰が選手の対応をするか？誰が試合に出場させるか判断するか？：

アメリカのカレッジレベルでは、ATC（アスレティックトレーナー）が必ず各学校に配属しており、試合に出られるかどうかはATC を中心に議論し、判断できない場合はドクターに診てもらい医学的な判断をもらったうえで最終結論を出しています。コーチが選手を試合に出したくても、トレーナーが責任を持って出場させないこともあります。今は免責の問題もあるため、医科学的な意見を聞き判断することがとても大事になります。

アメリカとは違い日本の学生スポーツのレベルでは、トレーナーが常駐しているチームは多くありません。日本でも良い形を作っていく為には、現場と医療機関をどうつなげていくかが大切です。トレーナーがいるチームであれば、トレーナーが対応します。トレーナーが評価し、ドクターからの診断が必要であれば病院へ行かせます。医学的診断の元、試合に出すのか出さないのかは指導者が決定するケースが多いです。試合に出すのであれば、トレーナーよりコンディショニングメニューが提示され、選手はメニューに取り組んで少しでも良い状態を作ってから試合に臨みます。

〇トレーナーがいない場合の対応：

トレーナーがいない場合、何か異常があれば病院に行かせるということが大事です。選手自身の自己判断で病院に行かなくて大丈夫だと思っていても、事後に再発したり、他部位に障害が起きたりするケースがよくあります。最近は、病院に行った際に自身の状態や思っていることをドクターに話ができない選手が多いようです。また、病院に行けば試合に出場することを止められると思い、病院に行かない選手も多いです。異常があれば病院に行くことがまず第1ですが、病院に行ったら自分のチームとしての立場やどのような大会を控えているのかということをドクターに話した上で、適切な処置をしてもらうことがとても重要になります。

〇病院を受診した選手の例：

大会前にある高校3年生の選手が怪我をして病院を受診すると、ドクターより安静にするようにと言われました。選手と話をするとドクターに診断をしてもらって話を聞いているだけで、選手自身の状況（大会日程や高校3年生で最後の大会だということ等）を何も伝えていないことが分かりました。選手にどうしたいか問いかけると、「試合に出たい」と返事があった為、もう一度病院に行って自身の状況と大会があるということ、試合になんとか出たいということを伝えるように指示をしました。結果、3年生の最後の大会に怪我を考慮して種目数を限定（調整）し出場することができました。

上の例のように、病院に行った時にしっかり話ができるかどうかが大事になります。しっかり話をした上でやっぱり試合には出られない状態だと判断されれば受け入れることが必要ですが、そこまで話をすることでドクターも前向きに考えて対応して頂けます。何もせずに話を聞くだけで大事な大会に出られないとなると、一番後悔するのは選手です。

学生スポーツの場合は、選手の意思や気持ちを尊重することも大事です。高校生で競技スポーツを終える選手がほとんどなので、選手の立場や役割、大会の重要性、その選手の将来を考えて、どうすることがその選手にとってベストなのかを選手の周りを取り巻く人間が話し合いながら進めていくことが必要です。

参加者：指導者１名、理学療法士８名、学生１名　　合計１０名

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

次 回 の 開 催 予 定

次回の開催予定は、下記の通りです。個人的に質問のある方は少し早めにいらして下さい。この機会に是非ご参加下さい。

平成29年8月7日 「現場でのトレーニングの実際」